

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

凄腕 トレーダーの 戦い方

億を稼ぐ
トレーダーたちII

Tomoyuki Hayashi

林 知之

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

本書は、原則として、インタビュー当時の情報に基づいています。
また、投資の判断は自分自身の責任において行ってください。

はじめに

良書を見極めるポイント

本書の特長、そして読み方を示す前に、一般的な相場書籍について物申したい。

競争である以上、「売れる本」を作るべく努力しなければならない。タイトルや装丁で目を引こうと努めるのも当然だ。とはいえ、行きすぎた商業主義が目につく。

効率を求めるのが資本主義の命題だが、何もせずにラクして儲ける[〃]ことしか考えない投資家に、安易に迎合していないか――。

「1日30分」という本があれば、次に「1日10分」という本が出版される。その上をいこうと「1日5分」とうたった本が出れば、「1日1分」という本が登場する。まずは気づいてもらうこと、次に手に取ってもらおうこと、まえがきや目次に目を通してもらうこと……こういったプロセスなしでは買ってもらえない、主張を聞いてもらうことはできないのだが、ハレンチと評するしかない売り方に世の中全体が傾いているのではないかと感じてしまう。

日々の仕事を抱える個人投資家は、時間が限られている。だが、「何分を選ぶか」ではなく、タイトルと主張を落ち着いて見比べながら内容を吟味し、自分に有益な本を選択してほしい。

1日の中でトレードに費やす時間を示した本が、すべていいかげんだという意味ではない。上っ面の見栄えだけを競う、姑息な情報のデコレーションには気をつけてほしいというだけだ。

続いて、オトナに共通する錯覚、ありがちな落とし穴について述べたい。

相場書籍は「手法」に関するものが多い。誰だって、具体的なやり方、儲け方を知りたいのだから当たり前だ。しかし、「手法とは何か」という疑問に正面から向き合ってもらいたいのだ。

どんな分野でも、プロとアマチュアでは視点が大きく異なる。トレードの世界で代表的なものを挙げるならば、「予測とは何か」である。「予測が当たれば儲かる」と考える向きが圧倒的多数だと思うが、プロはそう考えない。本書に登場する沼田武氏は、次のように述べる。

「勝率は、50%を超える必要がないと考えています。相場の本質は『当てること』ではなく、『根拠のある売買をすること』だからです」

トレードは、スポーツなどのように、始まりと終わりが決まっていない。好きなきに始めて、好きなきに終わりにすることができる。だから、「はい当たりです」と一定の金額を受け取るのではなく、予測が当たったあと具体的にどう終わらせるか、途中で何をするか、いつまで続けるか、といった自分自身の対応によって結果が決まるのである。

この自分自身の対応、誰から指示されることもなく、特別な制約を受けることもない自由な行動を上手にコントロールするために、沼田氏は「根拠のある売買」と表現したのだ。表現こそちがうが、この発想そのものは、すべての実践家が共通して重要視する部分である。

また、予測が曲がった（外れた）ときにどうするかも、重要な課題だ。

同じく本書に登場する田畑昇人氏は、「心理的にラクな方法を実行するために70%の勝率を求める」と述べている。沼田氏をはじめとした多くのプロが考える、「当たった予測を育てる」発想ではない。値幅取りを狙わないかわりに勝率を高め、その分だけレバレッジを高めにするという、彼が選んだ「設定」なのである。そんな田畑氏でも、ひたすら当てようとしているわけではないし、30%の負けをどう処理するかに目を向けているのは当然である。

このように、どんな「味つけ」にするかは人それぞれだが、「手法」を構成する要素は「予測法」だけではない。「ポジション操作法」と「資金管理法」を加えないと語れない——これが、厳然たる事実だ。日常生活で考えてみれば、誰もが納得する説明が可能だ。

「今日、雨は降らないだろう」というのが、個人的な予測である。そう予測した結果、「カサをを持たずに出かける」という行動に出る。これが、トレードのポジション操作にあたる。しかし、ポジション操作とは、第三者の判定を待つだけの「決め打ち」ではない。予測に反して雨が降ってきたら、「カサを買う」「雨宿りする」「タクシーに乗る」といった対応をするはずだ。

雨は降らないとの予測が「当たらないと困る！」という重たい位置づけになってはいけないのだ。予測が外れて雨が降ってきただけで約束の時間に遅れるようでは、社会人失格である。ほかにもあり得る不測の事態を想定して、対応策を用意したうえで少し早めに出かけるのが、オトナとしてのマナーでありルールだろう。この部分が、最後の資金管理法に相当する。

こう細分化してみると、なるほどということになる。しかし、実際の株式市場には、カサを持たずに出かけたなら雨が降ってきた……この状況で何の対処もせず、ズブ濡れのまま立ちすくんでいる人が大勢いる。上がると買って買ったら下がってしまった……くさいものにフタをして「塩漬け」にしている個人投資家は多い。いや、大半の平均的な投資家が、そうなものかもしれない。

雨が降るかどうかは、昨今の天気予報を上手に利用しても、ズバリ言い当てるのが難しい。だから、対処を考えて行動するのだ。だが、その行動指針は人によって異なり、いわゆる「正解」、万人に通用する模範解答は存在しない。沼田氏と田畑氏のちがいからもわかる通り、「予測法」「ポジション操作法」「資金管理法」という3つの要素のバランスで成否が決まるからだ。

結論を述べよう。多数ある「手法」に関する本は、「すぐに儲かる秘密の方程式」を求める「塩漬け投資家」の、現実を無視した欲求に迎合している。手法を構成する3つの要素を、良書を見極める際の助けとしてもらいたい。そして、考え方ややり方は人それぞれだから、手法の優劣を考えるのではなく、自分が好きになれるかどうか、自分に合うかどうかで判定してもらいたいのだ。

インタビューたちの声

私が運営する投資助言会社「林投資研究所」では、会員向けの『研究部会報』を発行している。読者である会員一人一人が自分の手法を確立できるようにとの思いから、私以外の実践家の声も掲載している。そのひとつが、この本の元となった「相場師インタビュー」だ。

名前を売りたい、ビジネスチャンスを広げたい……そんな思惑が強く先行する業界人もいるが、そういった方々からの申し出は断っている。逆に、こちらからお願ひしたところ快くインタビューに応じてくれた人、ビジネスに関係なく私との相場談義を楽しもうと時間を割いてくれた人たちが「相場師インタビュー」の対象者で、この本に収録した実践家の面々なのである。

いきおい、「すぐに儲かる秘密の方程式」という俗っぽい需要には応えていない。読者の底力となる情報として、プレーヤーとしてのあり方、姿勢、その手法を構築したプロセス、売り買いを行う際の自己コントロール法など、一般の相場書籍には書かれていない事柄を語ってもらっている。私自身が、同じプレーヤーとして、その部分に強い興味をもっているからであり、つまらない情報ビジネスとかかわらずに自立しようとする投資家に最も有益だと確信するからだ。

すべてのインタビューに、こういった特長がある。それを最大限に生かすのが、私から提言する「本書の読み方」である。

さて、カッコよく本書の特長を示したが、私の筆力不足で本音が伝わりにくい部分はないのか、との疑問も浮かび上がるだろう。私も常に心にとめていてことで、インタビュアの録音を聞きながら文章を書くときは細心の注意を払っている。幸いなことに、原稿を書き上げて校正刷りにしたゲラをインタビュイに送ると、ほぼ全員が、うれしくなるような言葉を返してくれる。

「いやあ。いいですねえ！ なんとなく話したただけなのに、言いたいことが整理されています」私の想像で具体的な言葉をつくり上げた部分は、ひとつずつ確認することになっているが、「やっぱり！ こんなこと話していませんよね。でも、まさにこの通り。よくぞ言葉にしてくれました」との返事をもらうことになる。私自身がトレード技術を高めたくて相場談義を行い、文章にする段階でその効果を楽しんでいる。そんなワクワク感が、読者にも伝わることを願っている。

なぜ「3・11」か？

研究部会報に「相場師インタビュ」を連載しながら、「3・11とマーケット」も手がけることになった。東日本大震災による直接的な被害がなかった人も、被災地の情報に心を痛めた。だから、たとえマーケットに限った話題でも抵抗があるのだが、生の記録を今後のそなえとして共有するためにインタビュするというのが、出版社側からの提案だった。

類のないタイトルで目を引くという商業的な狙いと、真の実践家の内面を知ってもらおうという純粋な気持ちとが合致した企画だったのだ。だが、私がエネルギーを注ぎきれなかったために、文字通りの企画倒れとなった。インタビュウの数が足りなかったのである。

申し訳ないと謝罪するのが、せめてものオトナの対応だが、今回のインタビュウ集に、異なる観点の話を盛り込むことができたので、それはそれでよかつたと思っている。

本書に収録された2種類のインタビュウから、トレードの利益につながる「ダイヤの原石」を見つけてもらいたい。

末筆ながら、インタビュウに応じてくれた実践家のみなさんに心から感謝の気持ちを伝えたい。そして、この本の編集と出版に携わってくれた関係者のみなさん、そして林投資研究所のスタッフにも深くお礼を申し上げる。

2017年11月

林知之

坂本慎太郎 (Bコミ) ファンドマネージャー、証券ディーラー、個人投資家、3つの窓から市場を観察する独立トレーダー兼コーチ

「**ちがいがい**に目を向けるのが**株式投資**です」

1. 満を持して学生デビュー／2. バチンコ理論／3. 師匠、仲間、ライバル／4. 損と益のバランス／

田代岳 (YEN蔵) 英系、米系のメガバンクで20年以上、為替ディーラーとして相場を張った、経験豊かなマルチプレーヤー

「**相場は対応力。でも数字を追うだけではありません**」

1. やり方は勝手に盗め／2. 野蛮な世界ではなくなった／3. 世界の中心はロンドン／4. ブルーチップはカラ売り／

高橋良彰 「特別インタビュー」3・11とマーケット

(エイ・ティ・トレーダーズ代表兼トレーダー)

「**不安の中、いつも通りに仕事をしました**」

1. 帰宅が最優先課題／2. 腹五分目

村田美夏 知性の奥に野生が光る行動派の女性トレーダー

(ウルフ村田)

「**トレードすることで人とつながりたい**」

1. 長銀の破綻／2. トレーダーとしてデビュー／3. トレードを続ける理由

沼田武 相場を極めるために日夜、超ド級の研究に没頭する独立トレーダー

(アンディ)

「**予測を行動につなげる純真さを求めています**」

1. 満玉張って倍々ゲーム／2. 「東京時間足」で世界を見通す／3. 究極の状態とは

上島浩司 「特別インタビュー」3・11とマーケット

(フロトレーダー)

「**災害は売りではない**」

1. スクリーンを押さえないから新規売り／2. 帰宅難民に／3. ミスプライスの嵐／4. 機械のトレードで流動性が確保された

田畑昇人

持ち前の頭脳を素直に駆使する若手トレーダー
〔FXトレーダー〕

「ビット量産のやさしいトレードが理想です」

1. 金融取引が手に届く範囲にあった／2. 9カ月で資金を20倍にした／3. パターンを想定する／4. デイトレードの管理術

134

本河裕二

〔証券ディーラー〕

荒れば荒れるほど稼ぐ野性のトレーダー

「私は張りません。乗るだけです」

1. 反射神経の勝負／2. 乗る、張る、切り取る／3. ストックは枯渇する

156

黒木弘明

〔証券ディーラー〕

「特別インタビュー」3・11とマーケット

「平時に戻るのを待ちました」

1. 仕事は酔っ払いの相手／2. スタイルを変えなかった／3. リスクとリターンは等しい／4. 有事と平時

176

盛田聖一

〔バルバロス〕

市場のすき間をとことん探る個人トレーダー

「行動には理由が必要なんです」

1. 最初は「儲かる数式」を探した／2. 営業マンは問題解決してはいけない？／3. 株価を左右する、何か？／
4. 何も勉強しない人が多い／5. オトナの事情

188

本間忠司

〔証券ディーラー〕

機能する、材料張り、で利益を出す証券ディーラー

「経済を知れば株式市場の動きが読めます」

1. 嗅覚／2. 変化への対応力／3. 適正な肌感覚／4. セロ番手で動きに乗る材料張り

212

編集後記に代えて——巻末対談（田代岳・坂本慎太郎・林知之）

あなたは、どれだけ儲けたいの？
「イタヨミ流」勝ち続ける投資家の資質

1. 脱イナゴ！／2. ブレーキの踏み方を考えよう／3. 転び方の練習だよ

232

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

インタビューのプロフィール

坂本慎太郎（さかもと しんたろう）／Bコミ

こころトレード研究所所長。大学卒業後、メーカー勤務を経て、日系の証券会社でディーラーとして活躍。その後、かんぽ生命に転職し、株式、債券のファンドマネジャー、株式のストラテジストを経験。2015年、中級者向けのトレード指導を行う、こころトレード研究所を、2016年に「株のデイトレード・スイングトレード通信スクール」を運営する株式会社イタヨミを設立。株式以外にも、債券、不動産、太陽光発電所等、さまざまな投資を行う。主な著書・出演に『朝9時10分までにしっかり儲ける板読み投資術』（東洋経済新報社）、DVD『しっかり儲ける板読み投資術』（パンローリング）がある。

田代 岳（たしろ がく）／YEN蔵

米系のシティバンク、英系のスタンダード・チャータード銀行で合計20年以上にわたって為替ディーラーとして活躍したあと、投資情報配信を主業務とする株式会社ADVANCEを設立。“YEN蔵”の名で親しまれ、セミナーや講演等を精力的にこなすかたわら、ブログ「YEN蔵のFX投資術」、メルマガ「YEN蔵の市場便り」は、個人投資家にも人気を博している。ドル、ユーロなどのメジャー通貨のみならず、アジア通貨をはじめとするエマージング通貨のディーリングについても造詣が深い。2016年、坂本慎太郎氏とともに株式会社イタヨミを設立し、現在は同社の代表取締役会長を務める。

高橋良彰（たかはし よしあき）

現在は個人トレーダーとしてのんびり生活しているが、ブロップファームのエイ・ティ・トレーダーズ代表取締役だった時代は、自らもトレードを行うプレーイングマネージャーとして、的を絞る手堅いトレードで記録的な利益を積み上げた実績をもつ。

村田美夏（むらた みか）／ウルフ村田

1993年、東京大学経済学部をトップで卒業後、日本長期信用銀行に入行。本店で国際と信を担当した後、法人営業やマーケットを担当。銀行に7年勤務後、金融トレーダー兼エンジェル投資家として、海外や日本の複数の企業支援を10年間行う。2010年にサクセスワイズを設立して代表取締役役に就任。農業・飲食・健康に関連する事業者の販促PRサイト「健康安心なび」などを運営するかたわら、講演の依頼を多数こなしている。主な著書・出演に『億を稼ぐ東大卒トレーダーが教える おひとりさまの「肉食」投資術』（ビジネス社）、DVD『株で年2億円稼ぐ東大卒トレーダー』（パンローリング）がある。

沼田 武（ぬまた たけし）／アンディ

専業トレーダー。自身が運営するブログ「アンディのFXブログ」で、日々のFXトレードに関する売買手法について執筆。東京時間で一目均衡表や“もぐら叩き”と名付けた手法で多くの投資家を魅了する。営業マン時代、日本で1番と2番の仕手筋（投資家）から大口注文を受けるなど、その確かな投資眼には定評がある。メディア取材も多く、「週刊SPA!」「YenSPA」（扶桑社）、「ダイヤモンドZAI」などでも紹介された。主な著書・出演に『17時から始める 東京時間半値トレード』、DVD『アンディのもぐらトレード 正しい根拠に基づく罫線売買術』（いずれも、パンローリング）がある。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

上島浩司 (うえしま こうじ)

仮名。約30年間の経験をもつ証券ディーラー。アウトドア派のようでインドア好き、浪花節を好みつづ早稲田大卒の相当な理論派。そんなバランスが周囲を魅了する。実際、1991年にデリバティブの部署に配属された中で唯一、業界に残っている。

田畑昇人 (たばた しょうと)

高校3年生時に模擬試験にて偏差値34をとるも、猛勉強してわずか2カ月で偏差値を70まで上げた。しかし、志望の東京大学には受からなかったため、壮絶な学歴コンプレックスを抱える。大学院で晴れて東京大学に入ったものの、学歴コンプレックスゆえに「周りの東大生には絶対に負けたくない」と思いながら生活。大学3年生でトレードを始め、50万円を9カ月で1,000万円にまで増やした。学費を支払いながらFXで生計を立て、現在は、日本人の金融リテラシー向上を目指し、金融教育のパーソナルファイナンス講師としても活動している。主な著書に『東大院生が考えたスマートフォンFX』（扶桑社）がある。

本河裕二 (ほんかわ ゆうじ)

証券ディーラー。蟹座のO型。メールが得意で内向的だが、100kmマラソン10回完走の実績をもつスポーツ派。1990年に日本大学数学科を卒業して証券界に入る。のべ7社で24年間、先物およびオプションのディーラーを務め、累計30億円の利益を上げた。デイトレード中心で、1日の最大損失は500万円、1日の最大利益は6,110万円。月間最大利益が1億円なのに月間の最大損失は800万円と、リスクマネジメントに優れているのが大きな特徴。ファンドの立ち上げに携わったこともあり、プレーヤー同士のつながりを大切にすることから、業界人が交流する場「マーケットフォーラム」の創設にも深くかかわった。

黒木弘明 (くろき ひろあき)

仮名。証券ディーラー。大きな一発ホームランを狙わず、着実にヒットを重ねるタイプ。それこそがプロの思考。3.11後の混乱では、冷静に様子見に徹し、個人投資家がそのまま見習うべき姿勢を見出せる。

盛田聖一 (もりた せいいち) / バルバロス

仮名。個人トレーダー。イベント投資を好み、常に大きな課題に取り組む、おそろしいほどの研究者。証券会社では営業、バックオフィスと異なる業務を経験したが、どんな環境にいても、価格形成の背景や人間心理を研究する独自の視点をもつ。

本間忠司 (ほんま ただし)

仮名。証券ディーラー。外部の情報に頼らない絶対的な世界観をもち、酒席での相場談義をとことん嫌う。小学校5年生で株式投資デビューいらい培ってきた経済の知識を武器に売買し、ニュースを聞いた一番手が行動した時点で利が乗っている。

株式会社イタヨミ

2016年設立。「投資家目線の投資家教育」を企業理念に、坂本慎太郎（代表取締役社長）と田代岳（代表取締役会長）が起業に参画。パンローリング社で「株のデイトレ・スイングトレード通信スクール」を運営するなど、精力的に投資家教育に取り組んでいる。

坂本慎太郎

ファンドマネージャー、
証券ディーラー、個人投資家、
3つの窓から市場を観察する
独立トレーダー兼コーチ

(B) (有)

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

「ちがいに目を向けるのが株式投資です」

4月に38歳になったばかりの坂本慎太郎氏は現在、自らの資金でトレードをするかたわら、継続的なスクール形式で、個人投資家に技術を伝える仕事にも携わっている。

彼の経歴は多彩だ。学生時代は個人投資家、卒業後にメーカーの営業マンを経験したあと、数社で証券ディーラー、かんぽのファンドマネージャーを歴任、そして今、再び個人投資家として活動している。

マーケットを見る目は当然、問口の広さと奥行きを兼ね備えている。スクールで個人投資家をリードする姿勢も丁寧で、説明もわかりやすいのだろう。なにより、業界人にありがちなキラキラ感がない。

インタビューは2017年4月28日、林投資研究所のオフィスで実施した。「隠れた実践家」ではなく、個人投資家を対象に活発に活動する人物であり、ホンモノのプレーヤーでもある。

1. 満を持して学生デビュー

——トレードを始めたきつかけはなんですか？

小さいころから「公文」をやっていたので、小学校に入る前に、けっこう漢字を読むことができたんです。それで、家にある新聞をふつうに読んでいました。

経済記事を読んでいたわけではありませんが、数字がたくさん並んでいる「株価欄」に興味をもったのです。親に聞いたら「それは株価だよ」と教えてくれましたが、両親とも株の売買はしていませんでした。なかつたので状況は進展せず……。ただ、TVゲームのソフトで株式売買シミュレーションがあつたんですよ。架空の銘柄が100くらいあつて、チャートも表示できるスグレモノで、それをやっているうちに株への興味がどんどん深まりました。

信用取引の仕組みも、そのゲームで覚えました。「なるほど。これを使うと、資金より大きな取引もできるんだ」って。

——でも、親の積極的な援助がないから、実際の取引はしていなかつたわけですよ？

そうですね。小学校5年生、6年生のころがバブル相場のピークで、新聞の株価欄で値を追い

ながら、「すげえ」なんて思っていましたけど、実際に取引できるわけではないので、当然のことですが、中学、高校時代は部活、バンドと、ごく当たり前のことに夢中になっていましたね。

株の本はときどき読んでいましたが、実践を伴っていなかったもので、特に研究テーマもなく、売買手法を学んだわけでもなく、ちょっとした機会に古本屋で見つけた本を読んでいた程度です。

—実際のデビューはいつですか？

初取引は、大学生の時でした。

アパート暮らしをしていると、勉強のほかに身の回りのことをする、バイトもする、遊びにも行きたい……時間とおカネを計算して「効率が悪い」という発想になったのです。そして、この非効率な状態を解決するには、効率よく収入を得るしかない。「それは株だろう」と……。

僕が20歳になった直後くらいのことでした。バイト代を貯めて資金に充てました。

—どんなことを基準に売買をスタートしましたか？

最初は対面取引で口座を開き、わりと短期間のうちにネット取引に移りましたが、今とちがって「デイトレードでクルクル回したって儲からないでしょ」という認識がふつうでしたよね。素直にそれに従い、月々かかるおカネを稼ごうとしていたので、1〜3カ月くらいの売買を想定しました。

最初は、単純な〃材料狙い〃でしたね。「夏に飲料株が上がるから仕込んでおこう」なんて、これらのマネー誌に書いてあるようなことが意外と機能していたんですよ（笑）。

特にこれという軸もなく、なんとなく「株って面白いなあ」みたいなノリで売買していました。それでも、家賃などの生活費を賄うことに成功していましたね。今よりも情報が少なく、「そんな考え方があるのか。試してみよう」と研究するうえで、ちよほどよかったのかもしれない。

多くのオトナが、雑誌などの断片的情報をもとに株を売買し、お約束のようにヤラせて消えていく……そんな現実を考えると、坂本氏が初期からコツコツと勝ちを重ねたことは信じがたい。

インタビュアーといっても、真の狙いは〃楽しい相場談義〃を展開することだ。彼と私で「なぜ勝てたのか」を考えていったところ、重要な要因に気がついた。生活費を稼ぐという、確固たる目的があったことだ。

少ない資金で目先の経費を稼ごうとするのだから、塩漬は許されない。買って上がったら利食い手仕舞いをする、ダメな場合でも引きずらないという〃適正な回転〃が実現したからではないか。本人は「次の銘柄を買いたかっただけです」などと言っていたが、最初から売買の〃期間〃を意識していた点がよかったのだろう。

利食いしたおカネを使ったらそれきり、元の資金で再び稼ごうと頭を働かせる——そんな状況が、ヘンな逃避行動を生まずに功を奏したのだという結論になった。

しかし、彼の華々しいスタートの裏には、もっと大きな勝利の要因があった。

2. パチンコ理論

——バイトだけでは、生活費を稼ぐための資金として、物足りなかったのではありませんか？

実は、パチンコで稼いで年間100万円、2年間で合計200万円ほどを追加できたんです。

母がパチンコ好きで、専業主婦のヒマつぶしとはいえ、手堅く勝つ方法を心得ていたので教わりました。パチンコは時間がかかるので、夏休みなどに集中して取り組んだのですが……。

実は、トレードの「チャート理論」と同じ発想なんですよ。

——詳しく説明してもらえますか？

今のパチンコは電子式で、「大当たり」でドンツと玉が増えるじゃないですか。その「波」を読む、ひとつの観察法です。

出玉の状況を時系列的に見て「この線がそろったらリーチのラッシュがくる」みたいな、一種の予測法ですね。

—そんなカンタンに当たるものなんですか？

当たる、というよりも、対応なんですよね。

狙った状況になるかどうかは予想できませんが、「リーチのラッシュになる可能性の高い状況」を待ちながら一定金額を使うんです。2000円か3000円つき込んでダメだったら、損切りして別の台に移動する、狙った状況が訪れたら続ける、という具合に、戦略を立てて計画的に臨むわけですよ。このアプローチは、そのままトレードに役立ったと思います。

—まさに相場ですね。でも、それを自分のものにする感性があったのでしょね。

ギャンブルというか、自分で戦略を立てて自由に行動する「ゲーム」が好きなんです。

あと、おカネも好きなんですよね。小学生のころは、お年玉をせつせと貯めて、親に貸して利子をもらっていましたから。

—なんですか？ それ(笑)。